



亀中だより

No.2 令和7年4月17日 文責 岡田



亀山中学校は市内における外国人生徒教育の「拠点校」として位置付けられ、現在50名ほどの外国につながる生徒が在籍しています。令和4年度から日本語初期適応教室「レインボー」が亀山西小学校に開設され、本校で初期適応を行うことは少なくなりましたが、レインボーでの学びを終えた生徒を中心に、日本語指導、教科補充学習を行っています。必然的に本校のすべての生徒は、海外の言語や文化、習慣等に触れる機会も増え、多文化共生を学ぶ機会に恵まれているといえます。亀山中学校としては、日本で学ぶ外国の子どもたちが困ることを少なくするだけでなく、日本人の子どもたちが、他国の習慣や考え方を知り、認め合うことのできる人へと成長してほしいと願っているのです。

3月に本校を卒業した生徒に多田夏美さんは、インドネシアから昨年9月に来日し、本校に編入しました。ここでの学校生活で彼女が感じたことを卒業式では生徒代表の一人として発表してくれました。わずか半年余りで身につけたとはとても思えない日本語で、しっかりと語ってくれました。彼女の努力とそれを支えたクラス、学年の仲間の姿は、“亀山中学校が目指す姿”そのものです。国、言葉、文化をこえて、互いを尊重しながら、仲間になっていく…。こうした経験が、この学校ではできるのです。

卒業式 多田夏美さんの言葉から…

私は生まれてから15年間をインドネシアで過ごし、昨年9月に初めて日本へ来ました。学校生活を通して、たくさんの思い出ができました。まずは最も忘れられない思い出の一つ、友達との思い出から。なぜなら中学生時代のほとんどの思い出は友達のおかげであると思っているからです。友達とはどんな時でもあなたの話に耳を傾け、どんな気分の時でもそばにいてくれる人です。くだらないことでも、面白いことでも、悲しいことでも、楽しいことでも、どんな時でも無条件にあなたのそばにいてくれて支えになってくれる人たちです。私はこれまで出会った友達にとっても感謝しています。母国の友達と別れるのはつらかったですが、あの思い出は一生大切にします。でも、日本で新しいともだちができたことも、私にとってはありがたいことです。学校の新しい環境は大変でしたが、ここまで来られたことに感謝しています。日本語があまり上手ではないにもかかわらず、日本で新しい友達が出てうれしかったです。クラスメイトや先生方にとっても温かく迎えていただき、とても幸せな気持ちになりました。日本へ来たことは私の人生にとって大きな一歩でした。緊張しましたが、インドネシアにいたときよりずっと幸せです。ここでとても楽しい時間を過ごせたので、これは私にとっても3年4組にとっても、間違いなく大きな思い出になるでしょう。この6か月間でたくさんのことを経験することができ、私を支えてくれたみなさんに心から感謝しています。日本での初めての文化祭の経験は決して忘れません。とても面白くて、とても楽しかったです。これからもこのような思い出がどんどん増えていくでしょうし、高校生活がこれ以上ないほどに楽しみです。私を温かく迎え、優しくしてくださった皆さんに感謝します。すべてが私にとってかけがえのないことであり、大切な宝物です。Thank you very much.

日本の常識は世界の非常識かも？

みなさんは「たこ焼き」はお好きでしょうか。大阪名物としても知られるたこ焼きですが、お祭りの屋台に限らず、お好きな方も多いのではないのでしょうか。では、みなさんはたこを食べない国が意外に多いことをご存じでしょうか。日本人が当たり前と思っていることが、他国では全く違う習慣といえることは少なくありません。またそれと同じく、日本人にとっては違和感があっても他国においては日常的であったり、宗教上の意味などから大切な習慣であったりすることもたくさんあるのです。



私たちの大切な仲間の中には、右のイラストの左の女の子がまとっている「ヒジャブ」というスカーフをつける生徒がいます。これはイスラム教で「自分の肌や身を守るため、大人になるまでつけたほうがよい」と神様にすすめられるのだそうです。日本にはない習慣ですが、日本人が着物を着るのと同じぐらいに当たり前のことなのです。また今年から始まる給食についても、宗教上の理由から食べずにお弁当を持参する生徒もいます。こうした文化や習慣の違いを知り、自分の国の文化を大切にすると同じように、他国の文化も尊重し、大切にできる気持ちや考えを持ってほしいのです。これからの中学校生活で、こうした人権や多文化共生についてもみんなで学んでいきましょう。